大地は生きている

——中国人の地理思想——

宮 崎 市 定

科学の発展は決して神秘を完全に征服してしまうものではなく、ただそれを遠方へ追いやるだけである。科学がまだ進歩しないとき、神秘は人間のそば近くに群がって、うようよしていた。その神秘のなかに何かの道理を見つけようとして理論を組立てるのが、学問の萌芽である。古代人の物事に対する考え方は無邪気で幼稚であるが、現今でもまだ神秘の世界が解消していない限り、我々も時には新たな神秘に対して、古代人のような童心の驚きをもつ必要がないだろうか。

古代中国人が土地に対して抱いた観念は大体二通りに分れると思われる。第一は土地は天と相対して表裏不可分の関係にたつているという考え方である。元来地理という言葉は天文に対するもので、天に日月星辰のような文（模様）があると同様に、地にも山野河海の理（きめ）があるという考えに基づく。だから地上の現象は密接に天上と相応ずるもので、政治の仕方が悪いと日蝕が起り、天に彗星が現われると地上に洪水や地震などの災害が起るとする。ところで天体はいつも廻っているから、どの部分が地上の何処に当るかをきめておかねばならぬ。そこに分野という考えが起つてきた。この学説は戦国頃（403B. C. ~ 221B. C.）に盛んになったものなので、中国をだいたい南から東、北、西にまわり、再び南へもどる円に従い、当時の有力国家である鄭、宋、燕、越、呉、齊、衛、魯、魏、趙、秦、周、楚の13部に分ち、それぞれの土地が天球の黄道28宿上のどの部分に相応ずるかを定める。天球上の標準を黄道にとつたのは、云うまでもなく遊星がこの附近を回転するからである。そこでたとえば黄道上の牽牛星座のあたりに彗星が現れたならば、その分野たる越の地方に何か災害が起る前ぶれだとして警戒しなければならぬ。分野については史記、漢書、淮南子などに詳しい記載があるが、この考えはずつと後世まで続いて、清代までの中国地志の冒頭には、必ず分野という項目が設けられて、その地方が何星座の分野に当たっているかを示している。

ところがだんだん経験をつむと、この分野の説は少しも当てにならないことが分つてきた。その上秦漢以後、天下一統の世の中になると、天子一人が天下の政治に対して責任をもつことになるので、地上の分野という考えも、分裂割拠の時代のような意味をもたなくなつてしまつた。また一方には中国人の地理的智識が拡大されてくると、分野のない土地が出てくる。もつともそれは昔の分野を拡大してゆけばすむが、そうすると空の面積と地の面積とが比例しなくなり、かつまた中国以外の外国をどうするかという問題も出てきて、地上の現象は到底天上の現象をもつてしては説明できないことが分つてきた。

そこで代つて勢力を得たのが第二の考え方で、これは土地を天から一応切り離して、土地は土地で説明しようとする。そして土地の神秘性を説明するために、大地は生きてると仮定する。それが地氣という言葉で表現されるが、氣というのは人間の呼吸を意味するように生の表徴である。土地も人体のように、血が通つていて、そこから気を発散し、それが万物を養うのである。地下の鉱物なども、この気が養成したものであつて、森林、漁場で濫伐、濫獲してはならないと同様、鉱山も濫掘すると鉱物が根絶してしまつて出なくなる。だから少しづつ採掘して、そのあとを埋めておくと、長い間に再び鉱物が生長すると考える。あまり急いで鉱石をとりすぎると、鉱脈の成長が追いつかないで枯渇してしまう虞れがあるなど、政治家が真面目で天子に上奏しているのを見受ける（銀鑛年開鑿，生長難繼—王圻羣文獻通考27趙可懷の語）。

人間は最も多く地氣の作用を受ける。地氣の旺盛な場所に墓をつくとその子供が栄え、そこへ家を立てれば家運が繁昌する。そこで地相の学(?)が成立するが、これをも地理という。宋代以後この用法が一般化して、地理正宗、地理全書などという名前の本があるが、それは Geography ではなくて、墓相、家相のことばかり書いてある。そこで誤解を避けるために、従来の地理という言葉の代りに方輿、坤輿という言葉が流行した。読史方輿紀要、図書集成の中の方輿彙編、坤輿輿典などがそれである。そして地相家の説によると地氣を包含した脈が地中を血管のように通つているのであるが、この脈に当るか当らぬかは、ごく僅かの距離でできる微妙な問題で、専門の術士でも失敗することがあるというからむづかしい。徽州の胡某というものが、寡婦を強迫して亡夫の葬地と定つている土地をまき上げて、そこへ父を葬つたところが、そこは役にたつない無穴の地であつて、間もなく子孫が絶滅し、これに反して寡婦が胡某から代りに与えられた土地に夫を葬つたところ、その地は靈穴であつて子孫が栄え、進

士及第者を多数出したという話もある（梁恭辱勸戒錄選7貪詐）。もちろん、この家相、墓相の説は科学的根拠をもたないので、どうしても説明のつかぬ実例もでてくる。杭州の葛某という者が、無縁仏の墓地を横領して、大君の墓地として朱氏に売りつけた。子孫の絶えた者の墓地として不吉なことが実証されている筈に拘らず、朱氏の家が繁昌し、反つて詐偽を行つた葛某の子孫が絶えたという（勸戒錄選7）。こういう事実は中国民族が長い歴史の間にいくらか経験したことがあろうが、これに対する説明として、人工によつて自然の地脈も変動するという考がまた古くからある。すなわち自然に地脈が流れている場所でも、その上流を開掘すると靈気が洩れてしまつて折角の地脈が枯渇してしまうというのである。秦の始皇帝に仕えた名將蒙恬が二世皇帝の時、罪なくして死を賜わつたが、死に臨んで自ら告白し、自分は万里の長城を築くような大工事を起して、地脈を多く切断し、そのためどれほど他人の子孫を絶滅させたか知れぬから、この報いは当然かもしれぬと語っている（史記88蒙恬傳）。

だから後世も帝王の陵墓の附近で工事を行うのは禁物で、明代の天子の祖先の墓のある鳳陽府では靈気を洩らさぬために、水利工事を実施することができないで人民がひどく困つたことがある（天下郡國利病書34泗州志河防）。既に墓地の所在によつて個人の子孫が衰えたり盛んになつたりするならば、国家の興亡ということも必然的に地気の盛衰で説明されなければならない。これは地脈にしても余程太い大きな動脈が地下を通つているとせねば話が合はない。そこでこの太い動脈に龍脈という名をつける。顧炎武の天下郡國利病書の初めの所に引いた王士性という人の地脈の説にそれが説明してある。これによると中国の地脈の起点はコンロン山脈であり、そこから三つの龍脈が東へ向つてのびている。黄河に沿うたのが中龍で最も早く発露したから、古代の首都となつた長安、洛陽、開封はみなこの線上にある。次に揚子江に沿うたのが南龍で三国南北朝の都の建康が著われ、南宋時代の杭州の都となり、明代には太祖が鳳陽から起り南京に都した。最も遅れて発したのが長城の線に沿う北龍であり、遼金の頃から盛んになり、元代到北京が都と定まり、明も永楽帝の時から北京に都を移すことになつた、と云うのである。

清朝が満洲から起つて北京に入り中国全土の主人となつたことは、ますますこの説を発達せしめた。有名な史家趙翼は、王氣は東北に向つて移動するという議論を立ててこれを説明したことが、内藤湖南博士の近世文学史論の附録「地勢臆説」に引用され、これについての博士の批判がのつている。

中国思想の面白いところは、分析を加えずにいきなり総合する点にある。これは中国の美術や文学にも現はれる傾向で、また中国医学が病因の分析をせずに總体的に体力と氣力の恢復を計ろうとするに依つてゐる。資源だとか、景觀だとか、交通だとかを問題とせず、頭から人文現象の変遷を地形で総合的に説明しようとしたなら、いきおひこういう地氣移動説に落ちつかざるを得ないであらう。そして大地が生きてゐるという命題は、ある点では現今も真理である。土地と人類との相関関係において、もし人類の活動をも自然の中に含めて、たとえば動植物の分布を自然景觀として考えると同じように取扱うならば、土地は生き物という外はない。土中で鉞脈が生長するという考え方も、ばかばかしいと云つてしまえばそれまでであるが、鉞石をとりつくしてしまつていつたん廢坑となつた場所が、技術の発達によつて再び優秀な鉞山として再生する場合など、人類の方が鉞脈に近づいたとも見られるし、また鉞脈が再び人類に近づいたとも見られる。それを鉞脈の生長という言葉で現わしても大した不合理はなさそうに思える。現今世界の政治、文化の中心は次第にアメリカやロシアの新開地に移りつつあるが、これも地氣移動論で説明できないであらうか。

Also, while Polynesians got to almost all islands in the Pacific by means of their primitive canoes, Phoenicians had possessed better vessels and navigation than Polynesians.

If indirect evidence such as above mentioned is taken into accounts, the circumnavigation of Africa by Phoenicians may be considered "gar nicht unwahrscheinlich," as remarked by Humboldt.

THE EARTH IS LIVING

ICHISADA MIYAZAKI

The Ancient Chinese usually had two kinds of ideas for the earth. The first idea, which diffused in the Age of Chan-Kuo, (戦国時代), was that phenomena in the heaven correspond with those on the earth i.e., a solar eclipse or an appearance of a comet suggested a misgovernment, a flood or an earthquake, and a each part of the globe of the heaven corresponds with a each part of several big countries in China.

According to second ideas, which diffused after the first idea, phenomena of the earth, separating from those in the heaven, was used to be explained by the idea of "vigor of the earth". The earth has "vigor of the earth" in it, which wade all the animals, plants and minerals vigorous. And "vigor of the earth" had many complex belts, people and things which was animated by the act of this vigor but those who were not on those belts were not influenced by this vigor. But the system of these belts was artificially changeable. And it was said that in China there was three main belts of "vigor of the earth" ("Dragon Belt" (龍脈) etc.). By the idea of Dragon Belt they want to explain historically the rise and fall of Chinese countries, and the other two ideas had remained alive until Chin (清) dynasty.

DIE WESTSLAWISCHE SIEDLUNGSWEISE IM OSTELBISCHE MITTELALTER

ICHIRO SUIZU